

金子隆一氏年譜 東京都写真美術館での活動

山田裕理

東京都写真美術館 学芸員

金子隆一氏年譜 東京都写真美術館での活動

山田裕理

2021年6月30日、東京都写真美術館に関わりの深い写真史家・金子隆一かね くりゅういち氏が逝去された。本稿は、金子氏が当館で関わった展覧会と、展覧会に際して執筆した論考を調査、整理したものである。この整理にあたっては、当館発行の年報『東京都写真美術館 年報』及び『東京都写真美術館 総合開館20周年史』（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、2016年）の掲載情報のほか、当館図書室の蔵書を参考とした。

金子氏は、谷中にある日蓮宗寺院・正行院（東京都台東区谷中）の32代目住職を務めるかたわら、写真研究家、写真集蒐集家として知られており、その蔵書は国内外2万点を超えていた。

父親の影響により幼い頃から写真に興味を持ち、高校では写真部に所属した。大学時代には、写真評論家の福島辰夫が指導していた全日本学生写真連盟に加入する。写真集の蒐集はウィリアム・クラインの『Life is Good & Good for You in New York: Trance Witness Revels』（1956年）を皮切りに1967年からはじめたという。1970年代には代々木上原の大辻清司の自宅兼アトリエで開かれていた写真の研究会にも参加した。1985年のつくば科学万博にあわせて開催された「パリ・ニューヨーク・東京」展（つくば写真美術館、1985年）に際しては、石原悦郎に声をかけられ、平木収、横江文憲、谷口雅、伊藤俊治、飯沢耕太郎とともに準備に携わった。

そして、当館の設立には第一次開館（1990年）に向けての準備段階から深く関わり、その後も長きにわたり専門調査員として勤めた。その間、その幅広い知見に基づいて、展覧会企画や他の学芸員のサポートをしていただいた。また、当館のコレクション形成と図書室の蔵書収集には構想段階から深く携わり、3万6千点を誇る充実した収蔵作品及び6万冊を超える図書室の蔵書が今あるのは金子氏の尽力によるところが大きい。

ご自身のもつ豊かな知識を惜しみなく与えてくださり、2015年に当館調査員職を離れてからも、国内外の写真に関わる展覧会企画や執筆の仕事は絶えることがなく、当館でも収蔵に関わる作品調査において常に協力をいただいていた。2020年秋に倒れられた際にも進行中の仕事がいくつもあり、金子氏のその知見の広さとお人柄に、多くの方々が金子氏とのお仕事を楽しみにし、復帰されるのを心待ちにしていた。しかしそうした願いも届かず、2021年に逝去

❖1 東京都写真美術館図書室については、以下を参照。
https://topmuseum.jp/contents/pages/library_index.html
なお、同図書館の蔵書検索は以下を参照。
<https://library.topmuseum.jp/drupal/>

❖2 インタビュー「今さら人に聞けない、写真再入門 Vol.1「写真集」とは何ぞや？ 僧侶収集家による贅沢レクチャー」
<https://www.cinra.net/index.php/article/column-shashin-kaneko>

❖3 飯沢耕太郎「追悼：金子隆一さんのいない写真の世界を……」
<http://blog.livedoor.jp/tokinowasuremono/archives/53466283.html>

されてしまった。

写真集蒐集家であった金子氏は、膨大な数の写真集を渉猟することで蓄えた知識をもとに、日本近代写真史の土台を築き上げた写真史家である。学生時代には写真を撮っていたものの、その後は「自分は写真を撮ること以外のすべてで写真とかわっていき^{❖3}たい」との強い信念のもと、日本写真史の体系化に尽力した。ピクトリアリズム写真に代表される歴史の中に埋もれてしまった写真表現や写真家を見出し、それらを写真史の中に位置づけ、写真史を再解釈・再構成し、さらには国際的に見ても他に劣らぬ歴史や写真家が日本にも存在することを証明し続けた。現在の日本写真史における貢献度は極めて大きなものである。本稿に掲載するのは、金子氏が当館で携わった展覧会・執筆活動の記録であり、その膨大な業績を顧みればほんの一部でしかない。それでもなお、こうして金子氏の写真史家としての活動を詳らかにしていくことが、さらなる日本写真史の再解釈・再構築につながればと願う。

【東京都写真美術館での展覧会企画】

凡例

- ・展覧会タイトル、展覧会会期の順に記載した。
- ・複数名による企画の展覧会については、「企画」として、金子氏を含め企画者の名前を記載した。
- ・会期が異なる複数のパートからなる展覧会については、ひとつのパートのみを金子氏が企画した場合は、展覧会名とパート名を記し、企画者名を記載していない。パートごとの企画者が明らかでない場合は展覧会名のみを記し、すべてのパートの企画者名を併記した。

「オープニング写真展 東京 | 都市の視線」

1990年6月1日～7月10日

「都市の風景」

1990年11月1日～11月27日

「日本写真の転換 1960年代の表現」

1991年4月18日～6月18日

「木村伊兵衛の世界」

1992年4月17日～6月2日

「日本のピクトリアリズム——風景へのまなざし」

1992年8月28日～10月13日

「モダン^{トウキョウクラブソディ}東京狂詩曲」

1993年4月16日～6月8日

「核——半減期」

1995年9月21日～11月10日

「日本の写真 内なるかたち・外なるかたち」

第1部 渡来から1945年まで」

1996年4月9日～6月30日

「写真とメディアⅠ 肖像はいかに伝達されたか」

1997年4月5日～6月29日

企画：岡塚章子、金子隆一、関次和子、神保京子

「写真とメディアⅡ 戦争はいかに伝達されたか」

1997年7月4日～9月28日

企画：岡塚章子、金子隆一、関次和子、神保京子

「写真とメディアⅢ 名所はいかに伝達されたか」

1997年10月3日～12月27日

企画：岡塚章子、金子隆一、関次和子、神保京子

「視線の回廊1 物語とイメージ」

1998年4月3日～6月28日

企画：神保京子、金子隆一、中原淳行

「視線の回廊2 静物の世界」

1998年7月3日～9月27日

企画：神保京子、金子隆一、中原淳行

「視線の回廊3 仮想庭園」

1998年10月2日～12月23日

企画：神保京子、金子隆一、中原淳行

「視線の回廊4 集められた肖像」

1999年1月5日～3月24日

企画：神保京子、金子隆一、鈴木佳子、中原淳行

「写真表現の軌跡 第1部 日本の写真 渡来から1950年代まで
東京都写真美術館コレクションより」

1999年6月1日～8月15日

企画：金子隆一、岡塚章子

「写真表現の軌跡 第2部 日本の写真 1950年代から現代まで
東京都写真美術館コレクション展」

1999年8月20日～10月31日

企画：鈴木佳子、金子隆一、平方正昭

「写真表現の軌跡 第3部 ヨーロッパの写真」

東京都写真美術館コレクション展

1999年11月5日～2000年1月23日

企画：鈴木佳子、金子隆一、平方正昭

「写真表現の軌跡 第4部 アメリカの写真

東京都写真美術館コレクション展

2000年1月28日～4月6日

企画：鈴木佳子、金子隆一、平方正昭

「桑原甲子雄写真展 ライカと東京」

2001年6月19日～9月2日

「川田喜久治：世界劇場」

2003年3月29日～5月25日

企画：神保京子、金子隆一

「明日を夢みて アメリカ社会を動かしたソーシャル・ドキュメンタリー」

2004年11月27日～2005年1月16日

企画：鈴木佳子、金子隆一

「10周年記念特別企画 東京都写真美術館コレクション展

写真はものの見方をどのように変えてきたか 第1部 誕生」

2005年4月2日～5月22日

企画：金子隆一、三井圭司

「10周年記念特別企画 東京都写真美術館コレクション展

写真はものの見方をどのように変えてきたか 第2部 創造」

2005年5月28日～7月18日

企画：金子隆一、藤村里美

「10周年記念特別企画 東京都写真美術館コレクション展

写真はものの見方をどのように変えてきたか 第3部 再生」

2005年7月23日～9月11日

企画：金子隆一、鈴木佳子

「10周年記念特別企画 東京都写真美術館コレクション展

写真はものの見方をどのように変えてきたか 第4部 混沌」

2005年9月17日～11月6日

企画：金子隆一、中村浩美

「開館10周年特別企画展 植田正治：写真の作法

「僕たちはいつも植田正治が必要なんだ!」

2005年12月17日～2006年2月5日

「球体写真二元論 細江英公の世界」

2006年12月9日～2007年1月28日

「平成 19 年度東京都写真美術館収蔵展

昭和 写真の 1945 ～ 1989

【第 1 部】 オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）昭和 20 年代」

2007 年 5 月 12 日～ 6 月 24 日

「東松照明 [Tokyo 曼陀羅]」

2007 年 10 月 27 日～ 12 月 16 日

「平成 20 年度東京都写真美術館収蔵展

ヴィジョンズ オブ アメリカ 第 1 部 「星条旗」 1839-1917」

2008 年 7 月 5 日～ 8 月 24 日

企画：金子隆一、三井圭司

「甦る中山岩太 モダニズムの光と影」

2008 年 12 月 13 日～ 2009 年 2 月 8 日

「平成 21 年度東京都写真美術館収蔵展

旅 第 1 部 「東方へ」 19 世紀写真術の旅」

2009 年 5 月 16 日～ 7 月 12 日

「心の眼 稲越功一の写真」

2009 年 8 月 20 日～ 10 月 12 日

「木村伊兵衛とアンリ・カルティエ＝ブレッソン

東洋と西洋のまなざし」

2009 年 11 月 28 日～ 2010 年 2 月 7 日

「芸術写真の精華 日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展」

2011 年 3 月 8 日～ 5 月 8 日

「ストリート・ライフ ヨーロッパを見つめた 7 人の写真家たち」

2011 年 12 月 10 日～ 2012 年 1 月 29 日

企画：鈴木佳子、金子隆一、伊藤貴弘

「幻のモダニスト 写真家堀野正雄の世界」

2012 年 3 月 6 日～ 5 月 6 日

「光の造形 平成 24 年度東京都写真美術館コレクション展」

2012 年 5 月 12 日～ 7 月 8 日

企画：金子隆一、藤村里美

「機械の目 カメラとレンズ

平成 24 年度東京都写真美術館コレクション展」

2012 年 9 月 22 日～ 11 月 18 日

「日本写真の1968 沸騰する写真の群れ」

2013年5月11日～7月15日

「岡村昭彦の写真 生きること死ぬことのすべて」

2014年7月19日～9月23日

【東京都写真美術館展覧会図録及び関連書籍掲載論考】

1990

「東京 | 都市の視線」

『東京 | 都市の視線』展図録、東京都写真美術館、1990年、pp. 9-11

1991

「写真の渡来と広がり」

『幕末・明治の東京——横山松三郎を中心に——』展図録、東京都写真美術館、1991年、pp. 10-15

「日本写真の転換——1960年代の表現」

「展覧会ノート」

『日本写真の転換——1960年代の表現』展図録、東京都写真美術館、1991年、pp. 8-11, p. 166

1992

「展覧会ノート」

『木村伊兵衛の世界』展図録、東京都写真美術館、1992年、p. 173

「日本のピクトリアリズム——風景へのまなざし」

『日本のピクトリアリズム——風景へのまなざし』展図録、東京都写真美術館、1992年、pp. 7-11

1993

「都市のスナップ・ショット——モダン東京の写真表現」

『モダン東京^{トウキョウラプソディ}狂詩曲』展図録、東京都写真美術館、1993年、pp. 6-9

1996

「日本写真小史」

『日本の写真 内なるかたち・外なるかたち 第1部 渡来から1945年まで』展図録、東京都写真美術館、1996年、pp. 11-28

2001

「ライカ写真とは何か」

『カメラレビュー 桑原甲子雄 ライカと東京 ライカ・ストーリー・ブック』^{❖4}、朝日ソノラマ、2001年、pp. 110-111

❖4 「桑原甲子雄 ライカと東京」展関連書籍

「写真／近代の不確定性 アントワーヌ・プーペルの作品をめぐって」
『パリの幻想とエロス アントワーヌ・プーペル展』展図録、2001年、
東京都写真美術館、pp. 10-11

2003

『「写真」という大いなる謎を現前させる『書物』』
『川田喜久治 世界劇場』展図録、東京都写真美術館、2003年、p. 229

2004

「ドキュメンタリー写真の起源とその意味をめぐって」
『明日を夢見て アメリカ社会を動かしたソーシャル・ドキュメンタ
リー』展図録、東京都写真美術館、2004年、pp. 11-13

2006

「僕たちはいつも植田正治が必要なんだ！」
植田正治著、金子隆一、神保京子、仲田薫子編『植田正治写真集：
吹き抜ける風』、求龍堂、2006年、pp. 7-13

❖5 「植田正治：写真の作法」展関連書籍

「細江英公私説——『写真』という磁場を求めて」
『写真家・細江英公の世界 球体写真二次元論』展図録、青幻社、
2006年、pp. 4-7

2007

「主要文献目録」「展覧会ノート」
『東松照明 [Tokyo 曼荼羅]』展図録、東京都写真美術館、2007年、
pp. 172-183, 191

「戦後写真小史——『昭和』をとらえた写真家たち」
「オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）昭和20年代」
『昭和の風景』展図録、東京都写真美術館編、新潮社、2007年、pp.
4-12, 13-60

2008

「アメリカ写真の歴史 カメラが発見した国の姿」
「そして現代へ」
『メモリーズ・オブ・アメリカン・ドリーム』、東京都写真美術館編、
新潮社、2008年、pp. 4-12, 180-181

❖6 「平成20年度東京都写真美術館収蔵展
ヴィジョンズ オブ アメリカ」展図録

「小川一真の時代」
『紫禁城 写真展』図録、東京都写真美術館監修、朝日新聞社、
2008年、pp. 11-12

「モダニズムの光と影——中山岩太の世界」
『蘇る中山岩太——モダニズムの光と影』展図録、東京都写真美術
館編、美術出版社、2008年、pp. 4-6

❖7 「平成21年度東京都写真美術館収蔵展
旅」展図録

2009

「異境へのまなざし」

『旅する写真』、東京都写真美術館編、旅行読売出版社、2009年、
pp. 9-15

❖8 「心の眼 稲越功一の写真」展図録

「『心の眼——稲越功一の写真』ノート」

『Mind's Eye 心の眼 稲越功一の写真』、求龍堂、2009年、pp. 133-135

「東洋と西洋のまなざし、その相違と相似」

『木村伊兵衛とアンリ・カルティエ＝ブレッソン』展図録、東京都写真美術館、2009年、pp. 9-15

2010

「写真史における「肖像」

『肖像 ポートレイト写真の180年』展図録、東京都写真美術館編、
講談社、2010年、pp. 9-15

2011

「日本のピクトリアリズム——写真史における位置をめぐって」

『芸術写真の精華 日本のピクトリアリズム 珠玉の名品展』図録、
東京都写真美術館、2011年、pp. 7-16

「世界認識の方法——ドキュメンタリー・スタイルとしての写真」

『ストリート・ライフ ヨーロッパを見つめた7人の写真家たち』展
図録、美術出版社、2011年、pp. 6-9

2012

「評伝・堀野正雄」

『幻のモダニスト——写真家 堀野正雄の世界』展図録、国書刊行会、
2012年、pp. 254-262

「機械の眼——カメラとレンズ」

『光と影の芸術 写真の表現と技法』展図録、東京都写真美術館編、
平凡社、2012年、pp. 108-111

2013

「クロニクル1968——『写真』の近代を変革するために」

「行為としての写真——全日本学生写真連盟の成立と最初の変革」

『日本写真の1968：1966～1974 沸騰する写真の群れ』展図録、東
京都写真美術館、2013年、pp. 7-16, 178-183

「写真する人、植田正治」

『植田正治とジャック・アンリ・ラルティエーグ——写真で遊ぶ』展図録、
東京都写真美術館、2013年、pp. 165-167

2014

「『写真』は誰のものか——岡村昭彦の作家性——」

『岡村昭彦の写真 生きること死ぬことのすべて』展図録、東京都写真美術館・戸田昌子編、美術出版社、2014年、pp. 187-190

【東京都写真美術館紀要】

2002

「新興写真研究会についての試論」

『東京都写真美術館紀要、No.3』2002年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp. 13-28

2004

「東京都写真美術館収蔵の堺時雄関係資料について」

『東京都写真美術館紀要、No.4』2004年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp. 39-70

2011

「東京都写真美術館寄託の福森白洋写真作品・資料および関係資料について」

『東京都写真美術館紀要、No.10』2011年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、共同執筆：藤原パウラ、pp. 17-35

2012

「東京都写真美術館寄贈の金坂健二写真作品・写真資料、映像作品および関係資料について」

『東京都写真美術館紀要、No.11』2012年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、共同執筆：遠藤みゆき、田坂博子、pp. 45-79

「リアリズムとプロパガンダ——社会へ向けられた写真家のまなざし」

『東京都写真美術館紀要、No.11』2012年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp. 81-91

2014

「シンポジウム『日本写真の1968』全記録／モデレーター：倉石信乃、パネリスト：土屋誠一、富山由紀子、小原真史、金子隆一」

『東京都写真美術館紀要、No.13』2014年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp. 13-51

2015

「展覧会『岡村昭彦の写真 生きること死ぬことのすべて』シンポジウム全記録／モデレーター：生井英考 パネリスト：百々新、小林美香、戸田昌子 司会：金子隆一」

『東京都写真美術館紀要、No.14』2015年、東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp. 31-63

結びにかえて

当館での活動を振り返るだけでも、写真史上で果たしてきた金子氏の功績の偉大さを窺い知ることができる。しかしながら、金子氏の当館以外での仕事もまた膨大であり、当館以外での展覧会企画、執筆活動、講演等については調査・整理段階にあるため、後々公開できるよう、引き続き多くの関係者の協力を得ながら、調査を行っていく所存である。

筆者自身も金子氏にお聞きしたかったことは山積みであった。しかし金子氏のいない今、遺された彼の言葉から、私たちは写真史の新たな視座を見出すことができるのではないか。金子氏が遺してくれた多くの言葉は、彼がこの世を去ってもなお、写真史を構築していくとはどのようなことなのか、どのように新たな解釈をつくりあげていくことができるのかを考えさせ、私たちの道標となってくれているのである。これらを後世に引き継ぎ、写真史の発展に役立てるためにもさらなる調査の継続が必要である。もし当館以外での金子氏の活動について詳細をご存知の方がいらっしゃれば、ぜひとも情報をお寄せいただきたい。

最後となりますが、金子隆一さんに深い感謝を述べるとともに、謹んで哀悼の意を表します。